

第1章 研究の目的と経過

1 雲部車塚古墳の概要

雲部車塚古墳は兵庫県篠山市東本荘に所在する。盾形周濠をもつ古墳時代中期の前方後円墳で、1900(明治33)年には宮内庁によって墳丘、周濠および南北両陪冢が陵墓参考地(「雲部陵墓参考地」、「陪冢い号」「陪冢ろ号」)に^{しじょう}治定されている。

篠山盆地の東奥に位置し、県守地区のある南側へ開く谷筋を塞ぐように、谷筋に直交する方向に墳丘の主軸を向けている(第1図)。主軸の方向はN99°Eで、ほぼ東西方向を向いており、現状では後円部2段、前方部2段、規模は総長250m、墳丘長140m、後円部径80m、後円部頂径18m、前方部幅90m、前方部長65m、高さ11m、くびれ部幅62m、後前高差2mを測る〔高井1992〕が、発掘調査の結果、墳丘長158m、後円部径104m、前方部幅112m、前方部長76mとする復元案がある〔徳田ほか2006〕。

周濠の外側には水田の畦畔によって周庭帯のような痕跡が認められるが、それに接するようにして、南北両側に陪冢が1基ずつ築かれている(雲部車塚北陪冢・同南陪冢)。埋葬施設は1896(明治29)年5月19



第1図 墳丘測量図

日に地元住民により発掘され、堅穴式石槨とそこにおさめられた長持形石棺があったと記録されている。現在知りうる埋葬施設や副葬品の総数、出土状況についての情報はこの発掘時のものに限られている。後に記された記録には互いに矛盾を含むものがあるが、その中でもっとも信頼されるのが、客観的で公的文書を含んでいる『車塚一時』(第2章第2・3節)である。

記録によると、堅穴式石槨は方形にめぐる埴輪列により囲まれていた。後円部中央のやや南よりであり、天井石は深さ1mのところからみつまっている。石槨の規模は、長さ約5.2m、幅約1.5m、高さ約1.5mを測り、壁面は煉瓦状の石積みで、赤く塗られていた。

長持形石棺は、長さ約2.1m、幅約1m、高さは東側で約0.8m、西側で0.9mと記録されているが、石棺の下半部は埋められているため、高さの数値は露出部分での計測値であり、石棺の総高ではない。蓋石は無文で、長辺側に各1個、短辺側に各2個の横断面が円形の縄掛突起をもつ。蓋石の横断面形は山形を呈している。身の長側石の縄掛突起は正面観が長方形を呈し、前後に1個ずつつくり出される。身の短側石の方形突出部は後円部側に2個、前方部側に1個、それぞれつくり出されている。石槨と石棺の隙間には白色の玉石が敷き詰められていた。

副葬品は石槨内から武具・武器類を中心にして出土している。記録によると刀剣類やホコが掛具によって石槨壁面に掛けられていた。副葬品の種類は刀34・剣8・ホコ2・「鎧鉢」(冑か)4・「胴」(短甲か)5・鏃107のほか、「刀掛」・「長穂先」・「石質の札」があったと記されている。これらは一部が取り上げられ、ほかはすべて埋め戻された。取り上げられた遺物は現在京都大学総合博物館に保管されている〔京都大学総合博物館1997〕。発掘時には長持形石棺の蓋は開けられていないため、これらの遺物は棺内のものは含まれず、すべて棺外のものとするができる。

その後、1983(昭和58)年には篠山町教育委員会が、2005(平成17)年には兵庫県教育委員会が古墳南側の周濠外側にある周庭帯を発掘調査した〔栗野編1984, 吉識・池田2007〕。2004(平成16)年には宮内庁書陵部が墳丘裾の調査と墳丘の測量をおこなっており、墳丘規模を推定する情報が得られるとともに、これまで詳細が不明であった埴輪や須恵器も出土している〔徳田ほか2006〕。(中村 弘)

〈参考文献〉

- 栗野章治(編) 1984『雲部車塚古墳―道路改良工事に伴う周庭帯の発掘調査報告書―』篠山町教育委員会・篠山町文化協会
- 池田正男 2002「何人カノ筆ニ成ル雲部車塚古墳」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第2号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 pp.43-68
- 京都大学総合博物館 1997『王者の武装―5世紀の金工技術―』京都大学総合博物館春季企画展展示図録 京都大学総合博物館
- 高井健司 1992「雲部車塚古墳」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社 pp.365-366
- 徳田誠志・有馬 伸・加藤一郎 2006「雲部陵墓参考地墳塋裾護岸その他工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第57号 宮内庁書陵部 pp.29-61
- 吉識雅仁・池田征弘 2007「雲部車塚古墳・車塚の坪遺跡」『年報』平成17年度 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 pp.76-77